

<嵐を叱りつけるイエスさま> マタイの福音書 8章 23-27 節

恐れ、不安、悲しみ、起こった出来事の原因を求めて悩み苦しむ、怒り、色んなものに対して疑いの思いを抱くことだってある。私たちはけっこう色んなことに怯え、恐怖を感じているのではないかな。

箴言 1 章 7 節『主を恐れることは知識の初めである。愚か者は知識と訓戒をさげすむ。』
本当に知るべきことというのは、神を知ること。それを知っている人は、やたらめったら何でも恐れたりはしない。人はおそれから解放されるためには、まことに畏れるべき存在とどう出会うか、それが大事なポイントになっていくのだろう。

『なぜこわがるのか、信仰の薄い者たちだ。』
とイエス様が言われた、その信仰とは何を意味するのか。

風や湖をイエス様が叱りつけると嵐がおさまった。これで恐怖が過ぎ去り解放されたと思いきや、弟子たちの心に残った感情は何だったか。それは、「いったいこの方はどういう方なのだろう」という驚き、恐れおののく思いだった。そしてこれが「信仰」だとイエス様は言いたいのではないかな。つまりまことに畏れるべきお方を知り、見続けること。



マタイの福音書 10 章 28 節『からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れ
てはなりません。そんなものより、たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすこと
のできる方を恐れなさい。』

このお方を畏れることこそが、実は私たちが恐れから解放してくれる。聖書は私たちに、おそれるべきものをおそれなさい。そのとき他のものは恐れるに足りないものになるのだと教えてくれている。

27 節『風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういうかたなのだろう。』
私たちがまた弟子たちと同じように、驚きをもってこの神であるお方を知り続けていきたい。